

「教育は鍵である」

〔愛媛県〕

愛媛大学附属高等学校 3年 飯田 夕和

「教育によって世界を変えていく」

私は、小学生の時にウガンダの子ども達をホームステイで受け入れ、教育は夢と希望を与えると知った。そして高校入学後、モザンビークを支援し続けているNPO代表の方との出会いをきっかけに、モザンビークを教育の視点から追究し始めた。しかし、ネットや本で調べても情報が少ない。そこで、実情を見るため昨年の夏に渡航した。現地では、平日にも関わらず物を買って歩く子ども達の児童労働や開発が進む街と電気も水道も通っていない村との大きな格差等を目の当たりにし、解決すべき社会問題の数々は「教育が原点」だと考えた。そこで帰国後、主に四つの取組をしてきた。1つ目は「話し合うこと」と「学ぶ意欲」の関係性を見出す研究だ。現地の人達の学ぶ意欲を感じたことで、日本の教育分野の課題はその低さではないかと考え、学生や教育関係者等にアンケートを取った。341名の回答から、話し合うためには雰囲気・関係性が大切で、学ぶ意欲が高まるだけでなく、創造的思考や他者理解にも繋がるが見えてきた。2つ目は教育を循環させるための活動だ。まず、社会問題や地域のこと等を「知る」ために講演会やワークショップの場に赴き、自分事と捉える学びを得てきた。また、「知る」きっかけ作りをしたいと思い、小中高大や地域社会、国際等約30の場で帰国報告・発表等を行ってきた。中でも、私に世界を知る楽しさを教えてくれた恩師の小学校で出前授業をした際、当時の自分がそうであったように子ども達が目を輝かせ、全て吸収しようとする姿があった。その縁で、この夏モザンビークの小学校教師がその学校を訪問・交流し、両国の教育の可能性が広がったと感じると同時に、「教育は循環している」と実感した。そして持続的な教育連携への挑戦として、今まで交流してきたモザンビークの高校と本校の「姉妹校提携提案書」を本校校長に提出した。実現に向けて駐モザンビーク（前）特命

全権大使、JICA研修生等と意見交換する中、先進国と途上国関係なく社会問題は存在し、互いに知り学び合うことが解決への第一歩になると改めて考えた。更に、学校横断型学習のために他校とのモザンビーク交流会を立ち上げた。学校を越えた横の連携・協働が必要だと考えたからだ。両校にとって初の試みである上、各校学習の場が異なり知識や活動内容が違うため、交流会の日程や内容を決めるのは簡単な事ではなかったが、両校の良さが活きるよう両校の代表者で思考錯誤し、話し合い、工夫を重ねた。交流会後の参加者アンケートからは、両校の学生が刺激を受け合い、外国を知ることで自国が見えてくる様に、他校を知ることで自校を知るきっかけになったことが分かった。3つ目は、教材作りだ。人と人、国と国の架け橋になることを願い、国旗をモチーフにしたゲーム「Friendshipキューブ」を考案したり、自分の渡航をもとに誰もがモザンビークを模擬体験できる「渡航すごろく」等を作ったりして、交流の場で活用してきた。4つ目は現地のフェアトレードを普及啓発するための応援商品の開発だ。モザンビークの伝統布で自分が縫った浴衣を着て文化祭のブース案内を行ったり、学生の需要や好みを知るためのアンケートを取ってオリジナルクリアファイルやぬいぐるみキーホルダーを考案したり、現地やフェアトレードを身近に感じてもらう「入口」となる工夫をしてきた。渡航を通し、全ては「知る」ことから始まると実感した。同時に、そこから得た学びに対して今自分にできることを継続的にやってきた結果、教育の可能性が広がってだけでなく、沢山のひとと出会い、多くの経験が生み出され、学びの輪が広がりが繋がり強くなることを強く感じた。私には、教育によって子ども達の可能性を広げるという夢がある。今後もグローバルな視点を持ち、「今自分にできること」をカタチにして、一歩ずつ進んでいく。